

『日本の抽象—その幾何学的側面』展



マーティン・チョーク、ウラジミール・タトリン《レリーフ絵画》の再制作、1913-1914(1980-1984 再制作)
木、紙、グワッシュ、油彩、厚紙、他 70x40x6cm

展覧会タイトル 日本の抽象—その幾何学的側面

出品作品（予定） マーティン・チョーク（ウラジミール・タトリン）、斎藤義重、
菅木志雄、高松次郎、堀内正和

協力 椿近代画廊

会期 2014 年 8 月 30 日（土） - 10 月 4 日（土）

会場 東京画廊+BTAP | 東京
〒104-0061 東京都中央区銀座 8-10-5 第4 秀和ビル 7 階
TEL: 03-3571-1808 / FAX: 03-3571-7689

開廊時間 (火—金)11:00-19:00 (土)11:00-17:00
閉廊日 日、月、祝

オープニング・レセプション
2013 年 8 月 30 日（土） | 16:00-18:00
東京画廊+BTAP にて

シンポジウム 「モダンとコンテンポラリー1970 年代を巡って」
2014 年 9 月 20 日（土） | 15:00-17:00
紙パルプ会館にて（〒104-8139 東京都中央区銀座 3-9-11）

お問い合わせ 佐々木博之 (hiroyuki.sasaki@tokyo-gallery.com)

このたび東京画廊+BTAPでは8月30日（土）より「日本の抽象—その幾何学的側面」展を開催致します。

日本に抽象美術の幾何学的表現がもたらされたのは、ロシアの作家の来日（1920年代）と、村山知義のベルリン滞在（1922-23年）がきっかけとなったと言われています。この大正期新興美術運動を受けて、1930年代に斎藤義重はロシア構成主義やダダの影響下で制作を始めます。これらの初期の幾何学的作品は戦火で失われましたが、1978年に東京国立近代美術館での個展開催に際して再制作されました。このとき、再制作を手伝ったのが、多摩美術大学で斎藤の教え子であった関根伸夫、小清水漸、吉田克朗ら「もの派」のアーティストです。

70年代以降の「もの派」のアーティストの作品の変遷には、日本の幾何学表現の先駆者であった斎藤の影響が見られます。既成の表現形式の逸脱を試みた点で、アンフォルメルなど世界的に起こった表現主義的動向と関連付けて語られることの多い日本の戦後美術ですが、戦前から受け継がれてきた系譜にこれらを位置づけて考えることが重要な作業になると考えられます。

本展では、ロシア・アヴァンギャルドの代表的なアーティストであるウラジミール・タトリンの再制作<レリーフ絵画>をはじめ、斎藤義重、堀内正和、高松次郎、菅木志雄の作品を展示し、日本の現代美術における幾何学的表現の系譜を検証します。

つきましては、本展の広報にご協力を賜りたく、ここにご案内申し上げます。



菅木志雄《PROTRUSION KX-87》（1987）
合板、ラッカー 130.5x95x6cm

本展の期間中、シンポジウムの開催を予定しております。皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

シンポジウム『モダンとコンテンポラリー — 1970年代を巡って』

開催日時：9月20日（土）15:00～17:00（開場14:40）

会場：紙パルプ会館 三階会議室（東京都中央区銀座3-9-11）

主催：東京画廊+BTAP

スピーカー：

平野到（埼玉県立近代美術館主任学芸員）

驚見和紀郎（アーティスト）

高木修（アーティスト）

モデレーター：

松本透（東京国立近代美術館副館長）

パルプ会館地図

